

日本人 EFL 学習者が *be* 動詞を多用するのはなぜか:

言語学的アプローチ

Why Japanese EFL Learners Misuse *be*?: A Linguistic Approach

野地美幸

Miyuki, Noji

Abstract

There are some linguistic differences between *be* and its Japanese counterpart *da*. They can be considered as tacitly causing some bad effects on Japanese EFL learners' *be* learning. Through a comparative study of Japanese and English, the present study provides an answer to the question of why Japanese EFL learners misuse *be*.

キーワード

be 日英語比較研究 comparative study of Japanese and English

誤用 misuse 日本人 EFL 学習者 Japanese EFL learner

言語学 linguistics

0. はじめに

英語入門初期の学生が、あるいはまた何年も英語を勉強しているはずの学生が、*I wrote this letter* と言うべきところ、*I was write this letter* と言ってしまったり、あるいは *I was ...* と言って考え込んでしまう。疑問文は常に（対応する平叙文に *be* 動詞が含まれていなくても）*Are you... ?* で否定文は *You are not ...*。英語教育に携わっている人であれば少なからずこうした *be* 動詞の誤用に遭遇していることで

あろう。本稿では、このようなつまずきの原因を言語学的観点から探ってみようと思う。

日本人が日本語を流暢に話せても日本語に関して明示的な知識を持ち合わせているかということそうではない。我々の頭にある言語知識はあくまでも暗黙の知識である。しかしながら、上記の問題は、「日本語」を母語とする学生が「英語」を学んでいることと決して無縁ではないであろう。つまり、英語の be と日本語の「だ」あるいは「です」の用法に全く違いがなければ be 動詞の学習はもっとスムーズに行われているはずである。そこで、be と「だ」の間どのような隔たりがあるのかを明らかにし、be 動詞学習を暗黙のうちに疎外している言語的要因を探ってみたい。

1. 「きれいだ」と「美しい」

(1a) の beautiful を「きれい」を用いて訳せば確かに be は「だ」に対応するが、「美しい」を用いた場合「だ」が後続することはなく、したがってこの場合 be は訳しようがない：

- (1) a. Mt. Myoko is beautiful.
- b. 妙高山はきれいだ。
- c. *妙高山は美しいだ。

「きれい」は(国語学、あるいは学校文法でいう)形容動詞であり、「美しい」は形容詞だからである¹⁾。「だ」の代わりに「である」を用いても状況に変わりはない。では「です」を用いたらどうなるであろうか：

- (2) a. 妙高山はきれいです。
- b. 妙高山は美しいです。

(2) のように「です」は形容動詞と形容詞の両方の場合に使用可能である。このことから be を「です」と対応させて訳しておけば問題は解消するかということ、そう簡単ではない。「です」の過去形は「でした」であるが、形容詞の場合 ((2b)) 「です」を「でした」に置き換えることはできない：

(3) a. 妙高山はきれいでした。

b. 妙高山は{*美しいでした/美しかったです}。

英語の場合と異なり日本語の形容詞は過去形を持つ、つまり活用する。したがって形容詞に後続する「です」は純粋に丁寧語であって、英語の be に相当する繫辞とは見なせない。

「だ」や「です」に関する形容詞と形容動詞の違いは日本語教育という観点から眺めても面白い。英語母語話者はしばしば次のような誤用をするという(奥津(1993: 80)):

(4) *妙高山はとても美しいだから、一度登りたい。

cf. 妙高山はとても美しいですから、一度登ってみて下さい。

「美しい」は形容詞なので丁寧語の「です」と結び付くことはあっても「だ」と共起することはない。(4)の誤用もまた be を「だ」や「です」と直結させることによって生じる問題である。

以上をまとめると、(i) 形容動詞には「だ」「だった」「です」「でした」を付けることが可能で、これらはみな繫辞として機能している、(ii) 形容詞にも「です」をつけることが可能であるが、この場合繫辞ではなく、丁寧語に過ぎない、したがって、(iii) 形容動詞を用いた日本語文には be に相当する語が存在するが、形容詞を用いた日本語文にそうした語は存在しないことになる²⁾。

2. be と「だ」の統語的差異

「だ」や「だった」、(形容動詞と接続する)「です」や「でした」が繫辞であるとして、次に問題になるのはこれらが英語の繫辞 be と全く同じであるのか、違いがあるとしたらそれは何か、ということである。本節ではこの問題を取上げてみよう。

2.1. どんな述語と共に用いられるか

英語には、be に後続し得る要素として、形容詞句 (adjectival phrase, AP) の他に、名詞句 (noun phrase, NP)、前置詞句 (prepositional phrase, PP)、動詞句 (verb phrase, VP)、文がある(下線部はそれぞれ

の句の主要部 (head) を示す) :

- (5) a. Nobody was [_{AP} aware of this danger].
b. They are [_{NP} police men that I met yesterday].
c. John is [_{PP} in love with her].
d. What he always does is [_{VP} watch TV].
e. Our basic aim is [_{TP} to eradicate hunger].
f. The fact is [_{CP} that I don't like to swim].

(5a, b, c, d) はそれぞれ AP, NP, PP, VP の例であり、(5e, f) は文の例である³⁾。(5e, f) は同じ文でもそのステイタスが異なり、厳密には (生成文法という言語学の分野では) それぞれ TP (tense phrase), CP (complementizer phrase) として分析される。

では日本語の場合はどうであろうか。「だ」と共起する要素としては、形容動詞句 (adjectival noun phrase, ANP (註 1 を参照)) に限らず、名詞句、後置詞句 (postpositional phrase, PP)、文がある :

- (6) a. 私は [_{ANP} 水泳が得意] だ。
b. それは [_{NP} 覆すことのできない事実] だ。
c. その手紙は [_{PP} 裕子から] だ。
d. 彼が引っ越したのは [_{TP} 少しでも会社に近くなるように] だった。
e. 問題は [_{CP} 彼女がそこへ辿り着けるか] だ。

(5) との対比から明らかなように、主要部が英語では句の最初に来るのに対して日本語では最後に来る。この語順の違いは英語が主要部先頭言語 (head-initial language) で日本語が主要部末尾言語 (head-final language) であることに起因する。カッコで示した句が (5) では be 動詞に後続し、(6) では「だ」に先行しているが、これも同じ理由が関係している。

(6) のカッコ内の主要部に関しては、わかりにくい点のみ補足すると、(6d) の「に」は学校文法では連用形の語尾として扱われているが、英語の to に相当する (つまり不定詞節 (TP) の主要部にあたる) 要素と考えられる。(6d) のカッコの部分を実不定詞節としたのは

Takezawa (1987) の主張に基づくものであるが、彼は「に」を「だ」の不定形 (つまり英語で言えば be) とする点で異なっている。これは Martin (1975) や奥津 (1978) における、「に」は「だ」の異形態だとする説 ((7)) に通じるものである:

- (7) 街は [街が 静かだ] なった →
街は [静かに] なった

では、ここではなぜ「に」を「だ」の不定形ではなく TP の主要部とするかであるが、それは、仮に「だ」の不定形だとすると「に」が動詞と結合し得ることが説明できなくなるからである:

- (8) a. 紀子は[本を借りに] 図書館へ行った。
b. 武は公園へ[散歩をしに] 出かけた。

(8) が示しているように目的節に動詞が現れた場合 (6d) と同様に「に」が必要となる。(6d) の「に」が繫辞であるとする立場を採れば(6d) と(8) の「に」は別の語ということになってしまうが、「に」が TP の主要部になっていると考えれば両者に「に」が現れることが系統的に説明される。また、この結果や目的を表す「に」は後置詞の「に」と同様に扱われることがあるが (eg. 影山 (1993: 86))、奥津 (1978) 等で論じられているように範疇としては区別するべきであろう。しかし、日本語に着地点 (goal) を表す後置詞句の主要部としての「に」と結果や目的を表す不定詞節の主要部としての「に」の両者を認めるここでの立場からすると、英語でもまた着地点を表す前置詞句の主要部 (to) が結果や目的を表す不定詞節の主要部として用いられることを、人間の認知という観点から単なる偶然としてではなく捉えられる (あるいは既に捉えられている) かも知れない。このあたりは今後の課題としよう。

話をもとに戻して、(6e) の「か」については、学校文法では終助詞として扱われているが、生成文法では CP の主要部 (すなわち C (補文化辞)) として分類されている。これに関しては筆者の知る限り特に異論は出されていない。

以上、日本語の「だ」と共起して述部をなす要素の中身について

見てきた。ではそうした要素の種類について英語の be の場合と比較してみよう。「だ」が形容詞句と共起しないということは前節で考察したが、その他の違いとして挙げられるのは、まず第一に、日本語には (6a) のタイプが存在し、英語には存在しないことである。これは形容動詞という範疇がそもそも英語には存在しない、つまり英語母語話者の心的辞書の中に形容動詞は含まれていない、ことから生じる違いである。

二番目の相違としては、英語には (5d) のタイプが存在するが、日本語には存在しないことが挙げられる。次の文を考えてみよう：

(9) a. 太郎が [_{VP} 伝言を残し] 忘れた。

b. *太郎が忘れたのは [_{VP} 伝言を残し] だ。

影山 (1993) によれば、日本語の動詞と動詞の結合による複合動詞は語彙的なもの（我々の心的辞書の中で1つの語彙項目と見なされるもの）と統語的なもの（心的辞書の中では別々の語彙項目であり、文形成の仕組みにしたがって結合されるもの）とがあり、「残し忘れる」のようなものは統語的複合語に分類される。詳しい分類基準や分析については影山 (1993) を参照してもらうことにして、当面 (9a) の「伝言を残し忘れた」は「残し忘れる」という動詞が「伝言」を目的語として取っているのではなく、「伝言を残し」で動詞句をなすことを理解して頂きたい。(9a) に対応する疑似分裂文が (9b) であるが、この文は非文である。動詞句が「だ」と共起しないことを意味する。したがって確かに (5d) のタイプが存在しないことになるが、これはおそらく日本語が膠着言語 (agglutinative language) であることと関係している。つまり、日本語の動詞は接辞的性質を持つからであると考えられる。(9b) の「残し」は何か適切な要素に付かなければならないが、「だ」に付いたとすると例えば「太郎が伝言を残した」のような文を形成したのと同じ状況が生ずる。したがってこの場合「だ」は「残し」が付加しうる適切な要素ではないため非文となる。

日本人に対する英語教育という観点からすると、最初に指摘した

差異は問題にならない。(6a)のタイプがないということは覚える必要がないからである。逆に英語母語話者が日本語を学ぼうとする際には苦しむことになるであろう。これに対して、2つ目の差異は英語教育上何らかの配慮が必要と言える。(9b)が非文になること、言い換えれば(5d)のタイプが日本語に存在しないことは、この種の文は理解しにくいという潜在的問題を抱えることになるからである。ただし、(5d)がなぜ良くなるかを説明するのは難しいし、また教育上決して建設的ではない。むしろ、(5e)で見たように不定詞節は可能であり、実際(5d)と共に(10)も可能であるので、(10)のような文でtoが随意的になるというように触れた方が良いでしょう：

(10) What he always does is to watch TV.

以上、繫辞が含まれる日英語の文について比較検討を行った。

2.2. beと「だ」の役割

本節ではbeと「だ」が英語と日本語の中でそれぞれ担っている役割を明らかにし、その違いから英語教育の面で必要となる教育的配慮を探ってみたい。

英語でbe動詞は必ずしも繫辞とは限らない。存在や様態の変化を表わす本動詞(main verb)としても用いられる：

(11) a. The bag is on the table.

b. I think, therefore I am.

(12) John want to be a doctor.

(11a)は日本語でも「だ」を用いて表現することが可能であるが、(11b)は不可能で、「ある」「いる」等の動詞を必要とする。この違いは、beにはexistのような本動詞(非対格動詞)の用法があるのに対して⁴⁾、「だ」はそれ自体本動詞にはなれない、したがって必ず述語を必要とする、からであろう。また(12)のbeは日本語では「(～に)なる」が対応するが、これもまた「だ」に本動詞としての用法がないからであろう。

英語のbeはまた、進行相や受動態を表わす際にも用いられる。

日本語では、進行相には「～ている」が、そして受動態には「～られる」が用いられ、「だ」が使用されることはない。進行相の be や受動態の be はおそらくどの教科書でも繫辞の be を学習した後にある程度時間的間隔を設けてそれぞれ学習するよう配慮がなされていることであろう。このように be を繫辞の be、進行相の be、そして受動態の be と混乱を避けて別個に学習するという点に関して異論はないであろう。しかし、この 3 種類の be は常に振る舞いを異にするわけではなく、否定文、疑問文、付加疑問文等の形成に関しては同じように振る舞う：

- (13) a. Mary is happy.
 b. Mary is not happy.
 c. Is Mary happy?
 d. Mary is happy, isn't she?
- (14) a. Bill is sleeping.
 b. Bill is not sleeping.
 c. Is Bill sleeping?
 d. Bill is sleeping, isn't he?
- (15) a. The plan was fixed.
 b. The plan was not fixed.
 c. Was the plan fixed?
 d. The plan was fixed, wasn't it?

これは、Pollock (1989) や Chomsky (1995) 等の知見に基づく生成文法の観点からすれば、(16) に示すように、be が時制文（否定文を含む）では主語の右隣へ（正確には TP の主要部の位置へ）、（主節の）疑問文ではさらに主語の前の位置へ（正確には CP の主要部の位置へ）、移動すると仮定することにより捉えられる：

- (16) [_{CP} C [_{TP} 主語 T (not) be [_{VP} ...]]]
- \uparrow _____ | \uparrow _____ |
 (ii) (i)

(13a, b), (14a, b), (15a, b) の文は (i) の操作により派生される。(13c),

(14c), (15c) の文は (i) と (ii) の操作により派生される。そして (13d), (14d), (15d) の文は、カンマまでの前半部分はそれぞれ対応する a の文と同じ方法で派生され、後半部分は (i) の後で (例えば is + not を isn't に変える) 縮約 (contraction) が施され、さらに (ii) の操作を適用することにより派生される⁵⁾。このように、繫辞の be、進行相の be、そして受動態の be の統語的共通性は (16) によって説明される。

また教育的観点から見れば、(16) は文の難易度を測る 1 つの客観的尺度として利用可能である。例えば、(13, 14, 15) に含まれる各文の学習効率を考えた場合、学習の優先順位はそれぞれ $a > b > c > d$ の順番となる⁶⁾。したがって、その順序で提示していくのが望ましいと言えよう。

以上、be が繫辞としてだけではなく本動詞としても機能していること、そして進行相や受動態でも用いられることを「だ」と比較しながら見てきた。日本語にはないこの be 動詞の用法が学習者に「様々な文で be が用いられる」という感覚を生じさせ、結果として be 動詞の多用に繋がっている可能性がある。

では、日本語の「だ」は繫辞としてだけ機能しているのであろうか。答えはそうではない。「だ」が日本語の中で果たしているもう一つの役割を簡単に見て行こう：

(17) A: わたしは昨日ラーメンを食べた。

B: 僕はウナギだ。

(18) A: どの魚が美味しい？

B: この魚だ。

(17B) (18B) の「だ」はそれぞれ「食べた」「美味しい」の意味で用いられている。このように日本語では動詞や形容詞が文脈等から推測できる場合「だ」で代用される (詳しくは奥津 (1978) を参照)。英語の be にはこのような用法はない。この差異に関しては、通常外国語学習は受け身的になりがちなので日本語をある程度意識しない限り、大きな問題となることはないかもしれないが、割合としては少なくとも誤用につながる恐れがあるという意味で指摘しておく。

以上、be と「だ」がそれぞれ英語と日本語の中で繫辞以外にも担っている役割があるということを考察した。

2.3. 文のタイプ

本節では、be と「だ」の繫辞としての用法に限定した上で、両者に差異があるかを検討してみたい。まず次の文を比較してみよう：

(19) a. 和子は幸せだ。

b. 和子は幸せか？

(20) a. Mary is happy.

b. Is Mary Happy?

(19a) の文に相当する疑問文は (19b) であるが、ここには「だ」が現れていない。これは実際現れていないのではなく音形を持っていないだけだと考えられている。というのは、「である」の形では生じ得る ((21a))、そしてまた (19b) の文を埋め込むと「だ」が現れる ((21b)) からである：

(21) a. 和子は幸せであるか？

b. [和子は幸だか] わからない。

「だ」の省略可能性の問題はさておき、(19) と (20) を比較して明らかに異なるのは、全節でも触れた主語と助動詞の倒置の有無である。英語では疑問文を形成する際に、be が (助動詞の 1 つとして) CP の主要部の位置に来る。日本語ではそのような倒置は起こらず、「か」がその位置を占める ((6e) を参照)。この違いは、繫辞文に限ったことではないが、主語と助動詞の倒置が日本語母語話者には習得上負担となる潜在的可能性を持ったものであることがわかる。

次に命令文を考えてみよう。日本語の形容動詞を用いた命令文には「だ」が現れないが、対応する英文では be が用いられる：

(22) a. 静かに (しろ/しなさい)。

b. Be quiet!

2.1. 節でみたように連用形の語尾「に」は to に相当する要素と考えられる。したがって命令文には「だ」が用いられないと言えるので

はないだろうか。もともと「だ」は命令形を持たないと言われるが、その理由としては意味的なものが考えられる。命令というのは通常未来に言及するものである。実際 (22b) の be も「～である」という意味ではなくて「～になる」という意味を持っている。したがって、(22a, b) の違いは、be が become のような様態の変化を表す本動詞として用いられるのに対し「だ」にそのような用法がないという違い（前節を参照）から生ずるものとして捉えられる。

また、「である」は「であれ」のように命令形を持つことがあるが、この場合本来の繫辞としての意味はなく「～になれ」という意味を持つ。したがって、ここでも上記の意味的制約が関わっていると考えられる。

3. 何をどう表現するか

何をどういった語で表現するかに関しては、例えば物の名前は名詞、その属性は形容詞、といったように一定の傾向はあるものの、2つの任意の言語を比較した場合当然そこには違いが生ずる。また、範疇は同じであってもカバーする意味領域が異なっていることもしばしばである。このような違いは、言語のアイデンティティーに繋がる個性を生み出す働きをする一方で、外国語学習に際しては大きな障害となる。本節では、この「何をどう表現するか」に関連して生じる be と「だ」の隔たりを明らかにしたい。

英語の形容詞 beautiful は日本語では形容詞「美しい」の他に形容動詞「きれい」を使って表現可能であるということは1節で見たが、この程度の違いはいわば誤差の範囲ではなかろうか⁶⁾。次の例文を見てみよう：

(23) a. John is in love with her.

b. ジョンは彼女と恋愛中だ。

(24) a. He like music very much.

b. 彼は音楽がとても好きだ。

(25) a. The taperecorder is out of order.

b. そのテープレコーダーは故障している。

(23)の述部には前置詞句が現われているが対応する日本語文には名詞句が現われており、ステイタスの全く異なる範疇が用いられている。つまり同じ意味内容が英語と日本語とで違った表現形式を持つ。しかしながら、この場合も英語の is に対応して日本語の「だ」が存在しているので、be の誤用につながる恐れはあまりないであろう。問題は (24) や (25) の場合である。英語では be が用いられない文が日本語では「だ」を使って表現されていたり ((24))、逆に英語では be が用いられる文が日本語では「だ」を用いないで表現されている ((25))。このような状況は決して稀な状況ではない。そしてこうした状況が一方では（一旦学習した）be = 「だ」の結びつきを弱め、他方では一般動詞があっても be が入り込む余地を作り出してしまっているのではないだろうか。

4. おわりに

本稿では、be と「だ」の隔たりが be の学習の障害になっているという推測の下、具体的にどういった点が be の学習の妨げになりうるのかを言語学的観点から明らかにした。

be 動詞というのは、沢山ある動詞のうちの 1 つに過ぎないが、英語でかかれた書物を開けば必ず目にする、あるいは会話の中でも必ず登場する、したがってそれだけ我々の認知世界に深く入り込んでいる重要な単語である。その単語をうまく使いこなせないということは英語の運用面で大きなハンディを抱えることになる。

本稿ではこのハンディをなくすために be と「だ」の隔たりを明らかにしてきた。しかしながら、be と「だ」の文法的差異を学習者に教えることを奨励するものではない。それでは、森田 (1990) が言うように「いたずらに対照語学的興味をかきたてる」だけとなってしまうからである。彼はまた次のように述べている：「学習者は教場においてできるだけ理論的思考を排除すべきだということは、教科書や教師も、文法上、理論的なことをいっさい捨てろということ

ではない。むしろ、学習者に理屈や理論を拒否すればするほど、教科書や教師には文法に対する理論的考え方が要求される。」本稿はむしろこの意味で、つまり、教師の文法に関する理論的考え方が深まるように、そしてその考え方が教科書編成等で生きるように、と意図したものである。

註

¹⁾ 形容動詞は (i) のように「さ」を付ければ名詞になるといった点で形容詞的であり、(ii) のように名詞を修飾する際に「の」を必要とするといった点で名詞的である。

(i) a. きれいさ

b. 美しさ

c. *美さ

(ii) a. きれいな景色

b. *美しいな景色

c. 美の象徴

したがって Martin (1975) に従い "adjectival noun" と呼ぶのがふさわしいと考えるが、用語上の混乱を避けるため本稿では形容動詞という用語を用いることにする。形容動詞の形容詞的・名詞的性質に関して詳しくは Shibatani (1990), Tsujimura (1996) を参照。

²⁾ ちなみに、英語（外国語）の形容詞が借用語として日本語に取り入れられた場合、日本語の中では形容動詞として扱われることになる (Shibatani (1990)): 「ハンサムだ」「タフだ」等

³⁾ 先に見た (1a) も形容詞が単独ではあるが AP としてのステイタスを持っており (例えば、beautiful の代わりに quite beautiful を代入することができる)、(5a) の類に入る。

⁴⁾ 存在文に現われる be もこの用法に入る。したがって be に後続する名詞は述語ではない (cf. (5b))。

⁵⁾ 付加疑問文の「後半部分」で省略されている動詞句の部分に

関しては、完全な文を生成してから同一性 (identity) の条件の下消去するという考え方と、最初はなくして文の解釈部門で補われるとする立場がある。

- ⑥ 単純に、適用する操作の数が多い程難易度が増すとは言えず、適用する操作の種類や単語の相違も問題となる。したがって前提が異なれば比較の対象とはなりえず、(16) は例えば (13, 14, 15) の間の順位づけには関与しない。
- ⑦ 実際、益岡・田窪 (1992) 等の外国人向け日本語文法書では教育的配慮から形容詞は (語尾が「い」で終わる) イ形容詞、形容動詞は「だ」と共に 1 語と見なし (したがって語尾が「だ」で終わる) タ形容詞、として提示されている。

参考文献

- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』, ひつじ書房.
- Martin, Samuel E. (1975) *A Reference Grammar of Japanese*, Yale University Press.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 (改訂版)』, くろしお出版.
- 森田良行 (1990) 『日本語学と日本語教育』 凡人社.
- 奥津敬一郎 (1978) 『「ボクハウナギダ」の文法: ダとノ』, くろしお出版.
- Pollock, Jean-Yves (1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20: 365-424.
- Shibatani, Masayoshi (1990) *The Languages of Japan*, Cambridge University Press.
- Takezawa, Koichi (1987) *A Configurational Approach to Case-Marking in Japanese*, Ph.D. dissertation, University of Washington.
- Tsujimura, Natsuko (1996) *An Introduction to Japanese Linguistics*, Blackwell Publishers.